

## 第7 人と自然が共生する暮らし

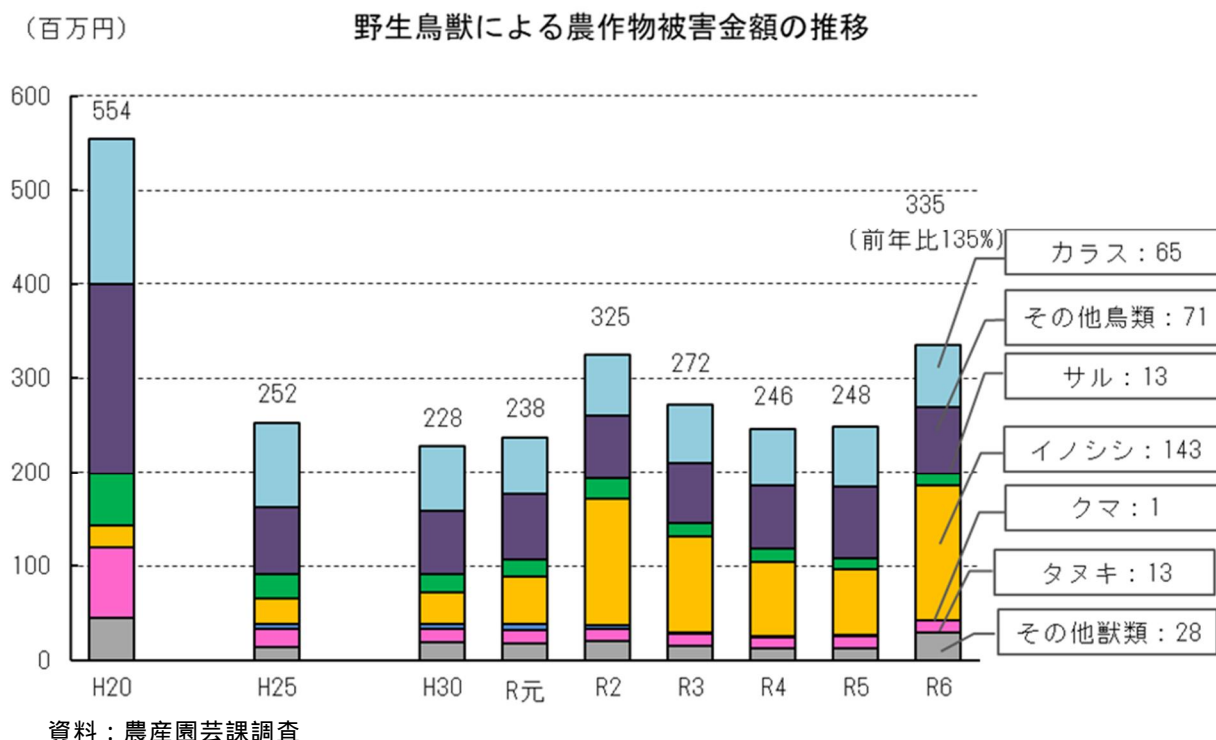


## 第7 - 1 野生鳥獣の適切な管理

野生鳥獣の生息域の拡大に伴い、農作物被害が増加した地域などでの電気柵の設置や捕獲強化などの取組を推進

### 1 動向

野生鳥獣による農作物被害金額は、生息域の拡大などにより、近年は高止まりしている。令和6年度は約3.4億円(前年比約135%)で、イノシシを中心とした獣類の被害が急増した。



### 2 施策の取組状況と主な成果

農作物被害は、野生鳥獣の生息域の拡大に伴い、これまで被害が少なく、電気柵の設置や捕獲が進んでいない地域で急増したことから、このような地域を中心に、国の交付金も活用し、対策を進めた。

電気柵の導入として、設置や管理方法を学ぶ研修会を開催するとともに、市町村等による導入を支援し、効果的な整備を進めた。

捕獲の強化として、イノシシ等の市町村域を越えた広域的な捕獲の実施や捕獲技術の向上を図る研修会を開催するとともに、市町村等による有害捕獲やライフル射撃場を活用した射撃技術向上に係る経費などへの支援を行い、加害鳥獣の削減を図った。

併せて、被害防止対策を推進する地域指導者を育成する研修会の開催や、野生鳥獣対策の専門家が、集落に出向いて地域の環境を診断し、農業者と話し合いながら対策の指導や助言を行う集落環境診断を実施し、地域・集落において対策を実施できる体制の整備を進めた。



< 電気柵の設置実習の様子 >



< くくり罠の設置実習の様子 >  
( 捕獲技術の向上を図る研修会 )



< 地域指導者を育成する研修の様子 >



< 集落の環境診断実習の様子 >

### 3 課題と展開方向

イノシシなどの獣類の生息域の拡大などにより、これまで被害がなかった地域などで農作物被害が増加していることから、捕獲や侵入防止対策の強化が必要であり、農作物の栽培期間に直接加害するイノシシ・シカの捕獲を推進するとともに、高齢化等への対応として管理負担が少ない耐雪型恒久電気柵の効果検証に取り組む。

併せて、市町村域を越えて移動するイノシシ・シカに対する複数市町村が連携した広域的な対策を進める。

被害防止対策の担い手確保と技術向上を図るため、集落環境診断などに基づく被害対策の実践リーダーを育成するとともに、捕獲技術習得のための研修会開催や効率的な捕獲のための ICT 機器の導入を推進する。

## 市町村域を越える広域的なイノシシ捕獲

イノシシによる農作物被害は、豚熱の発生もあり令和3年度以降は減少傾向にあったが、令和6年度は生息域の拡大や生息密度の高まりにより農作物被害が急増(前年度比2.1倍)し、野生鳥獣の農作物被害の中で最も多くなっている。

一般的にイノシシなどの有害捕獲の多くは市町村単位で捕獲許可を行い、加害個体の捕獲を行っているが、イノシシ等の鳥獣は市町村の境界を跨いで広域的に分布又は移動していることから、市町村が行う有害捕獲と合わせ、県が主体となり、令和4年度から市町村域を越える広域的な捕獲を冬期間に実施し、イノシシ及びニホンジカの個体数調整を進めてきた。

冬期間の捕獲は、足跡が追跡しやすいなど効率的な捕獲が可能といわれているが、積雪量やその日の天候などに大きく左右されるため、地形を熟知した経験豊富な猟友会員等に捕獲を依頼し実施している。

令和7年度はイノシシの農作物被害額が魚沼地域において前年度の約5倍に急増したことから、捕獲エリアを追加で設定し、関係する県猟友会支部と調整を図りながらイノシシ捕獲の強化を行なった。

引き続き、猟友会や市町村と連携して広域的な捕獲活動を実施することで、イノシシ等の生息密度を低下させ、農作物被害の低減を図っていく。



< 猟友会による広域捕獲 >

